

そのメロディに魅せられて♪

P3 「レヴェレイション」

人物ブックマーク

P4 「オードリー・ヘップバーン」

スタッフのセレクション！

P4 「空き家問題」

江戸川区Web図書館に2つの便利な機能が追加されました。

予約カート

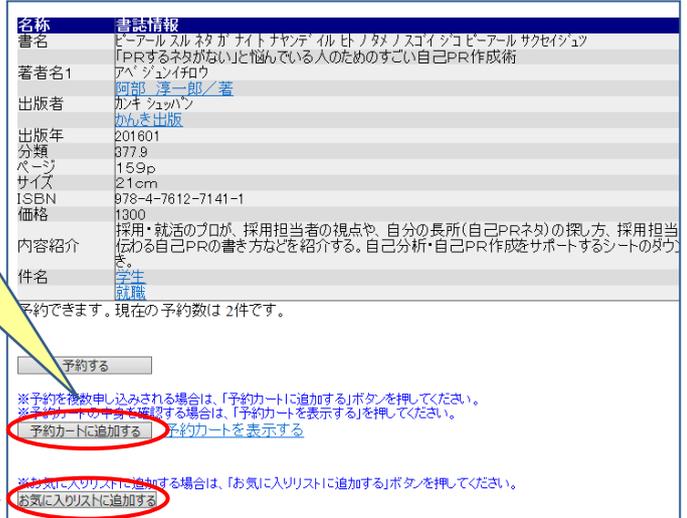
予約したい資料を「予約カート」に入れ、まとめて予約することができます。

- ・予約確定の手続きが1回で済みます。
- ・予約候補の資料を一覧で見ることができます。
- ・同時に予約した資料の受取館、連絡方法はすべて同じになります。

お気に入りリスト

「これから読みたい本」「おもしろかった本」など、「お気に入りリスト」に登録することができます。

- ・自分だけの資料リストを作ることができます。
- ・再度検索をしなくてもリストから資料詳細画面へ移動できます。
- ・Web図書館のみの機能です。館内OPACやカウンターでは確認できません。



※ログイン後に利用可能になります。
※詳しいご利用方法はホームページをご覧ください。

江戸川まいにんぐ 発掘 第47回

プロレタリア作家が生まれたところ

江戸川区内のイベントやスポットを、スタッフが調査して身近な情報をお届けする、地域密着型のコーナーです。

「ちょっと、これで咽喉(のど)を突いてくれ。追撃の奴等に捕虜になれやア、なぶり殺しに決まってるんだ。俺を殺して行ってくれ」

これはプロレタリア作家、細田民樹の短編「或る砲手の死」の中の一節である。砲弾で両足をやられた兵士が主人公の銃剣の柄に手をかけながら言ったセリフなのだが、何とも凄絶な場面である。細田は大正4年に徴兵され、3年ほど兵卒として服役したことがあるので、この短編小説はその経験が活かされたものなのだろう。

実は、この作家の生誕地は東京府南葛飾郡瑞穂村、今の江戸川区江戸川3丁目、今井橋付近とのことである。ただし、彼が江戸川区にいたのは6歳まで。その後、早稲田に入学するまでは広島で過ごしている。

以後、二度と江戸川区に住むことがなかった細田は、瑞穂村時代のことを何一つ書き残していないとのことである。とても、残念!! しかし、この地がプロレタリア作家を生んだ、という事実は変わらないのだ。

ところで、前述の「或る砲手の死」において、両足を失った兵士は、最後の方で次のようなことを叫ぶのであるが、これも何とも凄絶な場面である。

「俺はこんな身体を持って帰って、軍国主義のいい見本になってやろう。このまま、スローガンになってやるんだ。(中略)そうして軍国主義を潰してやるんだ。だから俺は自殺はせんぞ。」 やっぱり、平和が一番……。

参考資料

- 『日本プロレタリア文学集13』 新日本出版社 Z918=13 西葛西所蔵
- 『日本プロレタリア文学集30』 新日本出版社 Z918=30 西葛西所蔵

ライブラシネマ篠崎

「ロイドの人気者」

1925年 アメリカ
監督:サム・テイラー 他
出演:ハロルド・ロイド
ジョビナ・ラルストン 他

4月17日(日)

14時開演(13時30分開場)

場所:篠崎文化プラザ 講義室
定員:70名(当日先着順)

憧れの大学で人気者になりたいお人好しのハロルドは、皆にからかわれていることに気付かない。そんな彼がフットボールチームに参加し、ひょんなことから強引に試合に出場。ヘマとドジを連発するが、彼の意外な活躍で勝利する。

人物ブックマーク

人物ブックマークとは、著名人とその著作および関連本を紹介するコーナーです。

第三十五葉 オードリー・ヘップバーン

オードリー・ヘップバーンは1929年5月4日、ベルギーのブリュッセルで誕生しました。6歳の頃にイギリスの寄宿学校に入り、そこでバレエに出会い、バレエダンサーを目指すようになります。しかし、第二次世界大戦の影響で、飢餓による栄養失調に加え複数の病気を患いました。体力が回復した後、バレエ学校に入学するも、高身長であることと成長期に十分な栄養が取れず筋肉の発達が不十分だったことなどから現実を悟り、夢を諦めたのでした。

その後は積極的にミュージカルなどのオーディションを受けます。すると、『ジジ』の原作者が撮影現場で偶然オードリーを見つけ、それまで主役級の演技経験のなかったオードリーをミュージカル『ジジ』の主役に抜擢します。その次の作品がかの有名な『ローマの休日』。この映画は世界中でヒットし、多くの女性が彼女の髪型や服装を真似しました。それまでは女性の美といえば、マリリン・モンローのような色気のあるグラマラスな女性でしたが、オードリーのような気品があり、すらっとした華奢な体型の女性に人々は新たな美を見いだしたのです。彼女はこの初主演映画でいきなりアカデミー賞最優秀主演女優賞を獲得。一気に世界中から愛され

るトップスターとなったのです。

オードリーは生涯で二度結婚し、父親違いの息子が2人います。結婚後は人気絶頂期だったにも関わらず、仕事を抑え、母として妻として家庭に力を注ぎました。それでも二度の結婚は上手くいかず、三度目の結婚はありませんでしたが、晩年は恋人と2人の息子たちと幸せに暮らしていたそうです。

1988年からはユニセフの親善大使として活動を始めます。オードリー自身が終戦時、ユニセフの前身にあたる「アンラ」の援助で助けられたということもあり、精力的に活動に励みました。63歳で癌により亡くなる直前まで、世界中の貧困国を訪れて、飢餓や戦争で苦しむ子どもたちの現状を多くの人々に発信しました。

オードリーの演技、ファッション、生き方、考え方、その全てが沢山の人たちに影響を与えました。図書館にも様々な関連資料があります。ここで伝えきれなかった彼女の凛とした生き様や美しさを是非資料を手にとって触れていただけたらと思います。

関連書 『オードリー・ヘップバーン』 筑摩書房編集部著 筑摩書房 J289へ 篠崎ほか所蔵

スタッフのセレクション

篠崎図書館で働くスタッフが選んだおすすめ本を紹介します。

『空き家問題』 牧野 知弘著 祥伝社 365マ 篠崎ほか所蔵

ここ数年で一気に社会問題として話題になっている空き家の問題。様々な事情から住む人がいなくなり、放置され荒れてしまった家というのは、見た目にも衛生的にもまた治安の面でも負の要素しかない。

本書はそういった空き家の実情や空き家がもたらす社会問題、個人や自治体・国が今後行うべきことなどがわかりやすくまとめられている。

この本を読んでいて特に恐ろしいと思ったのは、こういった空き家が地方だけでなく首都圏でも急速に増加しているということである。よくよく考えてみると、少子高齢化で今後人口は減っていくと言われているにも関わらず、新築マンションがいつの間にか次々に建っていたりする。それらが数十年後には老朽化し、今問題となっている空き室だらけのマンショ

ンのようにっていくかと思うと怖くなってくる。

もっとも最近では、中古の家やマンションをリフォームし綺麗にしてから売ったり、古い家を安く買い、自身でリノベーションするなどの新しい動きもある。さらに自治体レベルでは所有者がわからなくなってしまっていて問題のある空き家を、代執行により解体したというニュースもあった。だが持ち主の許可なく家を解体するというのは法律的にとってもデリケートな話であり、また解体費用も税金からとなると単純に壊せばいいというわけでもなさそうだ。

家の問題というのは多かれ少なかれ必ずだれもが直面する問題である。この本を読んで個人だけではなく自治体や国も今後空き家をどうしていくのが良いのか、考えなければいけない問題であると強く感じさせられた。

編集後記

いつも関東ばかり旅行しているので、今年は遠出しようと思います。（風雲ふわふ丸）／峠の釜めしとても美味しかったのでまた駅弁を食べに行く旅ができたらなあと思っています。（かき氷職人）／この時期になるとなぜかいろんな人に連絡をとりたくなります。（しろやぎ）／旅といえば、熊野古道を歩いてみたいです。（まゆげ）

編集・発行：江戸川区立篠崎図書館
住所：〒133-0061

江戸川区篠崎町7-20-19

篠崎文化プラザ内

TEL:03-3670-9102

[しのぎ文化プラザHP]内篠崎図書館ページ

<http://www.shinozaki-bunkaplaza.com/library/>